

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：25502

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652048

研究課題名(和文)新聲社を調査対象とした明治期小規模出版社の出版活動に関する研究

研究課題名(英文)Research on SHINSEISYA : the small-scale publishing of the Meiji period

研究代表者

加藤 禎行(kato, yoshiyuki)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10318727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：新聲社の出版物の書誌調査等から、同社の出版活動が、営利的な経済活動としての出版業というよりはむしろ任意の主張を流布する言論活動としての側面に力点を置いており、結社としての性質が強いことを確認した。また、新聞雑誌等に既発表の文章を再録した出版物からは、新聲社の人的なネットワークと同時に、かつては読み捨てられていた時事的な文章が、再び商品として出版物となり、それが商品価値を持つ状況となっていたことも、うかがえた。また近世期と同様、明治期活版印刷でも紙型の流通は行われており、新聲社廃業後も、かつての新聲社出版物は、紙型が同業者に売却され、書名や体裁を変えながら出版物として流通し続けたことを確認した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I investigated following three points.(1)Publishing as the association.(2)Re-commodification of the texts that was already published.(3)Circulation of SHIKEI : printing materials.

研究分野：日本近代文学

キーワード：新声社 佐藤儀助 出版研究

1. 研究開始当初の背景

今日まで出版活動が続ける出版社である新潮社の前身となった新聲社については、これまで十分な調査研究が行われていなかった。もちろん佐藤俊夫編『新潮社七十年』(一九六六 昭和41年一〇月、新潮社) 紀田順一郎監修『新潮社一〇〇年図書総目録』(一九九六 平成8年一〇月、新潮社)などの社史記述で、その前史として新聲社の出版活動については言及されているが、たとえば新潮社の創業者佐藤儀助から森山吐虹へと出版社・出版権が譲渡されてからの新聲社出版物は、社史記述から消去されており、その全貌はいまだ把握されていない。この新聲社という出版社をひとつの事例として、日本近代出版史を考えるうえでの着眼点を模索しようと本研究計画を立案した。

2. 研究の目的

明治期出版社・出版物の研究は、近世文学研究領域が情報蓄積し、成熟させていった書肆・出版研究と比較した場合、大きく立ち後れている。本来、近世文学との相対的關係から言えば、資料の残存状況や情報量の多さといったアドバンテージを持つはずの近代文学研究だが、その数量的アドバンテージがそのまま作業上のディスアドバンテージとなっている。こうしたなか、比較的規模の小さな出版社を対象として選定することで、日本近代における文学史・文化史研究に何らかの発展をもたらさうような、出版社・出版物研究の萌芽的な可能性について検討することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

貴重なコレクションを有する図書館に所蔵される明治期出版物、および、入手することができた明治期出版物、さらには近年、飛躍的に状況が進んでいるデジタル画像をもちいたデータベース(近代デジタルライブラリー・国会図書館、古典籍データベース・早稲田大学図書館、近代文献データベース・国文学研究資料館、ほか)で、新聲社を中心とした明治期出版物の閲覧を行った。そしてこの基礎調査の方法を通じて、出版物の書誌情報を調査収集し総合していくことで、一義的には文芸出版社だった新聲社という中小出版社の出版物が、文芸出版にとどまらず、どのようなジャンルに広がりを持った出版活動を行っていたのかを検証した。

4. 研究成果

新聲社の出版物の書誌調査等から確認できるのは、まず、新聲社の出版活動が、営利的な経済活動としての出版業というよりはむしろ任意の主張を流布していく言論活動としての側面に力点を置いており、企業というよりはむしろ結社としての性質が際立っていたことだ。

そして、書き下ろし出版物とは異なる、新聞雑誌等に既に掲載された文章を再録した出版物からは、新聲社の人的なネットワークがほのみえると同時に、かつては新聞雑誌に掲載されて読み捨てられていた時事的な文章が、もう一度商品として出版物化され、そうした出版物が商品価値を持つような状況が生じていたことがうかがえた。

さらにまた、近世期木版印刷の版木と同様、明治期活版印刷でも紙型の流通は行われており、森山吐虹が新聲社を廃業した後も、かつての新聲社出版物は、紙型が同業者に売却され、時に書名や体裁を変えながら、出版物として流通し続けていたことを確認した。

なお、以下に、成果として公表した「新聲社発行『文藝新聞』解題稿 日清戦後文壇の新聞判型出版物と関連して」(『近代文学論集』第38号、平成25年3月)の概要を掲げることとする。

(一)

新聲社が『文藝新聞』を創刊した一八九九 明治32年は、田岡嶺雲『嶺雲揺曳』(三月)、小島烏水『扇頭小景』(五月)、妖堂居士『文壇風聞記』(七月)、田山花袋『ふる郷』(九月)、田岡嶺雲『第二嶺雲揺曳』(十一月)といった書籍が続々と刊行されており、新聲社が本格的な単行本出版活動に力点を置き始めた、業務拡張の一年間だった。こうしたなかで創刊された『文藝新聞』は、「あらゆる悪徳を以て満されたる現時の文藝界を警醒して、其醜風を打掃し、其腐敗を廓清し、更に新たなる、神聖純潔の文藝界を建設する」と、「発刊之辞」に声高に主張を掲げていたが、新聲社はまだまだ小規模な出版社でしかなかった。

(二)

明治新聞雑誌文庫所蔵の『文藝新聞』(請求記号 H36)の書誌事項を簡単に記述しておく。同文庫所蔵の『文藝新聞』は、第一号から第五号までが糸で一冊に合綴され、原紙の破損も著しく、本文を完全に確認できない箇所も各号の随所に見受けられる。また、破損の進行から原紙を保護するために、紙面全面に白色の薄紙が貼り付ける処置が施された面もある(紙越しに印刷面を透かし見ることは可能)。判型は縦三八八 mm、横二六八 mm。刊記は、各号とも第一面左端の余白に印刷されているが、欠損なく確認できるのは第三号だけだ。印刷兼編輯人の中根駒十郎は、一八九八 明治31年四月、新聲社に入社した、儀助の妻龍子の実弟で、また印刷人の大野喜六は、成功堂の堂号を持つ印刷業者で、新聲社出版物の印刷人としてしばしば奥付にその氏名を確認することができる。

(三)

この『文藝新聞』の編集、紙面構成で中心的な役割を果たしたのは、一八九八 明治 31 年冬、一八歳で上京してきた高須梅溪だった。後年、梅溪は繰り返しこの『文藝新聞』の編集経験を回想している。梅溪は新聲社に寝泊まりしながら佐藤儀助の出版活動を手助けする新聲社員となったが、梅溪が『新聲』に執筆した原稿などは、もちろん無報酬だったようだ。出版物としての『文藝新聞』を特徴付けていた点を振り返っておく。その第一点目には、やはり巻頭第一面「主張」欄に掲載され続けた高須梅溪の評論が挙げられよう。

梅溪の「主張」欄における評論は、年長者世代の既成の文壇コミュニティを批判すると同時に、新聲社が文壇の新機軸を担っていくという強い意志を掲げることで、同世代のまだ名を成していない青年文士を扇動し、新聲社コミュニティに無名の読者や将来の書き手である青年文士を抱え込もうとする論説になっている。こうした梅溪の論説が「主張」欄に継続的に掲載されることは、一定の論調を形成しながら読者コミュニティを組織化していく機能を持つ新聞というメディアにふさわしい。

高須梅溪と新聲社が『文藝新聞』創刊にあたって念頭に置いていたのは、一定の関心を東都文壇でも集めていた、大阪の新聞判型出版物だった『造士新聞』だろう。こうした出版文化の新潮流を大きな書肆は見過ごさない。すぐに博文館は『太平洋』第一号(一九〇〇 明治 33 年一月一日、博文館)を発行しており、『文藝新聞』の東都文壇における文芸メディアとしての新しさは束の間のものだった。

『文藝新聞』と新聲社の出版活動は何を志向していたのだろうか。定価二銭の『文藝新聞』を仮に一〇〇〇部発行して売り切り、その売上を全額回収できたとしても、売上額は二〇円にしかならない。しかもここから用紙代、印刷経費、取次経費、もし支払われていたなら謝礼といった経費が引かれていく。そもそも実業としての出版業という見地に立つなら、予測される利潤の小ささから創刊には至らない。

しばしば佐藤儀助の新聲社時代は、のちの大出版社である新潮社へと繋がってゆく黎明期として、立志伝めいた成功物語の冒頭部に置かれがちだ。だからこそ、出版業者としての挫折、そこからの不屈の精神による新潮社創業、そしてその出版業の成功が輝かしく語られてゆく。しかしながら、新聲社という固有名詞の「社」の一文字からは、出版業を営む会社としてではなく、思潮を伝播させ共有する結社としての含意の方を、強く読み取っておくべきだ。

新聲社の出版活動が雑誌・新聞・図書の三点を備えようとしたことについて、博文館が博文館発行雑誌・博文館発行書籍に新聞判型の『太平洋』を加えたような、膨張してゆく

出版書肆の経済活動になぞらえて理解するのは困難だ。むしろ、一時代前の民友社が『国民之友』(一八八七 明治 20 年二月一五日創刊)・『国民新聞』(一八九〇 明治 23 年二月一日創刊)・民友社発行書籍を備えつつ、一定の主張と論調を通じて、日清戦前の青年読者を鼓舞したような言論出版活動を志向していたと見た方がよい。

もちろん、この時期の新聲社の規模で、民友社が達成していた言論出版活動を志向すること自体、そもそもスケールの異なる荒唐無稽な夢想だが、印刷物を媒介として青年文士コミュニティを形成し、既成文壇に対抗しようとする動機と野心は、たしかに『文藝新聞』や新聲社出版物に確認できる。その無謀さは、『文藝新聞』が労力と経費を理由に終刊したに違いないことから窺えるはずだ。

(四)

一九〇〇 明治 33 年四月一日、文学史において重要な役割を果たす新聞判型出版物として東京新詩社『明星』が創刊されている。この新聞判型での『明星』創刊という着想や計画を鉄幹に与えたのは、新聲社の高須梅溪だったはずだ。梅溪は、新聲社出版物に関係する印刷業者のひとりだった、成功堂大野喜六をおそらく『明星』創刊時の鉄幹に紹介している。また初めてみずからの活字メディアを持つとしていた鉄幹に、編集実務についても助言しただろう。

この東京新詩社『明星』の創刊によって日清戦後文壇の投書雑誌文化は、新しい局面を迎える。翌年、廓清会編『文壇照魔鏡 第一編』(一九〇一 明治 34 年三月一〇日、大日本廓清会)の刊行を契機に、新聲社と東京新詩社は深刻な対立と法廷闘争を展開することになるが、その前年、両者はこのように近い距離のうちにあり、このふたつの結社の出版物は、同じ活版所で印刷され、流通していたことになる。

そもそも、関西文壇の出版文化だった文芸メディアとしての新聞判型出版物には、すでに『造士新聞』といった先行事例があったが、その文化は、大阪からやって来た高須梅溪の手になる『文藝新聞』によって東都文壇に出現する。この『文藝新聞』は短命のうちに頓挫してしまうが、与謝野鉄幹が創刊した東京新詩社『明星』が一定期間この形態を継承し、また博文館『太平洋』の継続的な刊行とも相まって、このフォーマットは東都文壇にもなじみ始める。そして新聞判型出版物は、『太平洋』が例外的に大きな書肆による商業出版だったにせよ、小さな書肆や結社のメディアとして、折に触れて文学史に姿をあらわすことになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

加藤禎行「新聲社発行『文藝新聞』解題稿
日清戦後文壇の新聞判型出版物と関連し
て」、査読有、日本近代文学会九州支部
『近代文学論集』第38号、平成25年3月、
pp69-85

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 禎行 (KATO, Yoshiyuki)
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：10318727

(2) 研究分担者

なし。

(3) 連携研究者

なし。